がま研かわら版

第 12 号

平成18年3月25日

発　行

筑波山がまの油売り口上研究会

霞ヶ浦環境科学センター夏まつりで

「さあさあお立会いがまの油」

佐藤　貞弘

昨年八月二十日に開催されました霞ヶ浦環境科学センター夏まつり二〇〇五に参加させていただきましたので、センターの紹介と紙芝居・がま口上の報告をします。

霞ヶ浦環境科学センターは、平成七年に土浦市・つくば市で開催された第六回世界湖沼会議を契機に設置が提唱されていたものが、十年目の昨年四月、霞ヶ浦を見下ろす土浦市沖宿の高台に開館された茨城県の施設で、「人と自然の共生する環境の保全、創造」を基本理念としています。

これまで茨城県は、水に親しむ機会の多い夏期の期間（海の日～九月一日「霞ケ浦の日」）を霞ケ浦水質浄化強化月間と定め、霞ケ浦をはじめとする県内の湖沼環境と水質浄化に対する意識を醸成するため、平成八年度より県内各地で「いばらき湖沼環境フェスティバル」を開催してきましたが、今年度はセンターが主催し、本館施設と近隣の市民運動広場を利用して「霞ヶ浦環境科学センター夏まつり」として開催されました。

会場のステージでは、地元の伝統芸能「戸崎囃子、沖宿囃子」そしてがま口上と紙芝居があり２回ずつ行いましたが、始まる前には案内放送とボランティアの誘導があり、毎回多数の方々が今か今かと会場で待っていてくれました。

さあ市村さんの登場です。紙芝居が始まると暑さも忘れて話に引き込まれて行く子供達や大人の様子が側で見ていて良くわかりました。流石です。

地元のお囃子では、外部では始めての披露となった初々しいものもあり、精一杯演ずる姿に感動を受けました。何事も、一生懸命が大事ですよね。

当日は、ことの外暑い夏の一日でしたが、地元の方々の熱い眼差しに楽しく・気持ち良く口上をさせていただきましたが、終ってみて、ちゃんとできたのだろうかと気持ちの高ぶりとは別に毎回不安がつきまといます。今後も初心忘れずに口上の奥の奥を目指して参りますので、林先生、宇野先生そして諸先輩にはご指導のほどよろしくお願い致します。

さて、もう一点紹介したいものがあります。センターホールには明治初期の彩色地図が床に貼付けられており、その上を自由に歩いて昔の土浦・霞ケ浦周辺をガリバーになった気分で散策できます。地図好きの私にとってはたまらないですね。施設見学もできますので皆様是非お出掛けになっては如何でしょうか。珍しい「霞ケ浦の鮎」も待っていますよ。

楽しかった忘年会旅行

宇野　次子

昨年十二月三日（土）午前八時、新治村役場前で塩原温泉ホテル「おおるり」からの送迎バス『湯けむり号』に乗車、元気よく出発いたしました。車窓より初冬の常磐道風景を眺めながら一路、塩原方面へ進行。やがて塩原街道を通過するころには、遠い山々の峰に新雪が美しく見えてまいりました。ホテル塩原温泉に到着。ホテル玄関わきに、宿泊する各種団体を歓迎する看板がズラリ掲示されているのを見て、あっと思わずおかしくてふき出しました。と申しますのは・・その看板には『**筑波山ガマ工場研究会様**』と書いてあったからです。なんと日本語のむずかしいことやら？

午後は急に曇り出し寒さもきびしくなり、ちらちらと初雪が降ってまいりました。まるで私たちを歓迎してくれているかのように・・。降雪は激しく、またたく間にあたり一面真白に薄化粧、塩原温泉一帯は情緒たっぷり冬景色となりました。

―夜は盛大に忘年会―翌日は朝食後、ホテルの近くにある『湯けむり会館』での人情時代劇を観劇。笑いあり、お涙頂戴の一幕でありましたが役者さん方の熱演により、ついほろりとさせられる場面もありました。帰路は、途中「道の駅」で休憩しながら十六時二十五分、無事到着。本当にすてきな忘年会旅行でした。お世話くださった林会長さん、ありがとうございました。

こんな鳥を見てきました

清水　泰清

六月二十一日から六日間、日本野鳥の会、茨城支部主催の「マレーシア探鳥会」に参加して珍しい鳥を沢山見てきましたので報告します。

今回のツアーは支部から海外探鳥の経験豊かな池野支部長と幹部の明日香さん、私を除くと平均二十年以上の経験者でもう国内では見る所が無くなってしまったベテランウオッチャー十六名、世界のバードウオッチングツアー専門会社の超ベテラン日比さん、現地ガイドのオオイ、チン、ホックさんと豪華な顔ぶれが揃いました。

マレーシアの首都クアラルンプールは赤道を挟んでインドネシアのジャカルタとほぼ同距離にあり、到着時の気温は三十三度。ここから百キロ走ると高度千五百ｍの目的地フレーザーズ・ヒルです。英国の探検家が百六十年前に開拓したなだらかな丘陵地帯は、その後政府と州によって高級リゾートになり、あちこちに古い石作りの建物が残る町並みは、まるでヨーロッパの田舎の雰囲気です。そのためか政府高官やスルタンのロッジ、バンガローなど、お城のような建物が並びます。年間平均気温二十℃で自然資産を大切にする連邦政府と地元の人達の力によって野鳥の楽園となっています。生息する鳥は確認されているだけで二百六十種。なかでも六月がベストシーズンだそうです。　赤道に近いので一年中、昼と夜はほぼ同じ朝七時半に明るくなり夜は七時半頃に日が沈むので、最初は面食らいました。

一日目のスケジュールはこんな具合です。六時起床、六時四十五分出発、持ち物は小さなリックに雨具、水、着替え、チョコレートなど。首から十倍の双眼鏡、二十五倍から三十倍のスコープを肩に担ぎます。半数の人は、スコープにデジカメを装着していました。バスで出発。窓から鳥を探すのですが先頭のガイドが気配を感じると停車、またはポイントでバスから降ります。鳥の声がするとその方向に一斉にスコープが並び、私のようにモタモタ探せずにいる人には、ガイドがさっと横からきて鳥の姿をスコープに入れてくれます。そこには　南国特有の色鮮やかな極楽鳥が、かわいい目をして映っているのですからたまりません。ベテランになると耳と目が訓練されていて素早く鳥を探しスコープで十分に細部まで観察出来るのです。九時半頃ホテルに戻り遅い朝食、休憩して十一時頃また出かけます。二時、昼食。四時から七時まで夕方の鳥を見てホテルへ。夜は今日見た鳥の話とまるで鳥ずくめの一日です。

二日目、あこがれのカササギサイチョウに逢えて盛りあがりました。「タイとマレーシアの野鳥」という高価な図鑑を五名程持参していて、現場で広げて確認しますが、こういうお目当ての鳥に逢えた日は、デジカメから画像を拾い出して何度も感激にひたるのです。カンムリワシ、カオグロクマタカ、キンバト、マレーモリフクロウ、キホホゴシキドリ、キエリアオゲラ、エボシヒヨドリ等々。夜の更けるのも忘れて話が続きます。私も「フレザーズヒルの野鳥」という図鑑を買って確認の資料にしました。

今回見た鳥の数は一四八種。参加者とガイドの協力の成果です。現地で三泊、途中の河岸で一泊したっぷり耳と目に土産を残して今回の旅は終りました。がまにぞっこんの私ですが、鳥にもますますのめり込む私です。

カササギサイチョウ

〈お詫び〉
紙面の都合で前号に掲載できず、半年遅れになったことをお詫びします。

永井兵助の時代

兵助考　第二弾

我らが永井兵助の生きた時代、それは経済面から封建制の維持が困難になり、新たな時代への息吹が感じられた時代だった。商品経済の浸透による農村の変貌、商業を基盤とする都市の形成が進んだ時代、農民の子として生まれ江戸へ出て新たな商売を考案した永井兵助は、ある意味時代を象徴する人物だったのでは・・・。

高橋　恒

兵助が生まれたのが元文二年（１７３７年）というから八代将軍吉宗の時代だ。宝暦三年（１７５３年）に江戸へ出て宝暦九年ころに蝦蟇の油を考案したといわれている。

ちなみに平賀源内流の平賀源内大先生は享保十三年（１７２８年）に生まれ、長崎遊学を経て宝暦六年（１７５６年）に江戸へ出る。翌年には初の薬品会を開き、以後宝暦十二年に壬午の物産会、明和元年（１７６４年）に火浣布（アスベストの布）製作、安永五年（１７７６年）エレキテルの製作などと続く。

享保や宝暦という言葉を聞くと、飢饉を思い出す向きも多いと思う。特に享保の飢饉は、天明、天保と並んで江戸時代の三大飢饉といわれ、「徳川実記」によると西日本を中心に九十六万九千九百人の餓死者を出したとされている。その信憑性は不明だが、かなりの死者が出たことは確実だ。北関東の農村の疲弊もいくつかの文献からも伺われるので、新治村もかなり疲弊していたと思われる。

江戸時代前半というのは日本の農業にとって画期的な時期だった。せんばこき（稲こきの効率を画期的に高め、女性の労働の場を奪ったということで「後家殺し」の異名をとった）や鉄製の鋤や鍬などの広がり、干鰯、油粕などの肥料が開発されるなど農業技術が進歩を遂げ、新田開発や灌漑も進んだ。米の生産量が増加し、享保期は米価が下降に向かった時代だ。そのような画期的な進歩の時代の後に三大飢饉は訪れた。兵助達百姓は農業の技術進歩の恩恵を受けられず飢饉に苦しめられ、潰れ百姓や耕作放棄された手余り地が増大し、江戸など都市部へ農民が流れ込んだ。そして重要なのは、大都市がその農民を吸収しえるところまで成熟していたことだろう。

経済の進化、端的に言えば商品経済の発達により自給自足の体制が崩れたのだ。農業を中心とした自給自足体制の下では、都市が吸収しえる人の数は限られる。江戸前期は幕府が作付を制限し主穀以外の作付を禁じた。それに上記の農業の進歩が重なり、農業を営まない、作物を作らない都市住民が生きる余地が出来てきた。元禄時代の都市文化の繁栄の陰には農業の変化があった。

米に余剰感が生まれれば換金するための商品作物の生産が始まる。参勤交代により江戸での生活を強いられた大名は金銭が必要となる。諸大名が競って換金作物の生産を奨励した。綿花や煙草、四木三草（しきさんそう）と呼ばれる茶、桑、漆、楮、麻、紅花、藍や讃岐の三白（砂糖、和紙、塩）などが代表だ。

享保年間には幕府が天領の年貢の一部を銀納させようとした。また、せんばこきや鉄製の農具を買うには貨幣が必要だ。米中心の封建経済が急速に貨幣経済にとって代わられる。農民も貨幣経済に巻き込まれる。換金作物を作らざるをえないが、換金作物は相場の変動が激しい。いざという時食料にならない。売物にはならないが食物になる雑穀を作っていた時代との違いだ。経済の進化、貨幣経済の浸透が農村を飢饉に弱い体質にした。

一方、この商品経済の発展が本草学、蘭学などの隆盛につながり国学などが盛んになったのもこの時代だ。貝原益軒の「大和本草」から始まって、稲生若水、丹羽正伯らが「庶物類纂」をしあげ、青木昆陽が甘藷を栽培し、海外の物産や医術を知るために蘭学が広まった。いわば国を挙げて名産品作りに奔走した時代だった。新しい知識、技術が求められ、新しい風が吹いた時代だった。平賀源内大先生登場の素地が出来上がっていった。

食い詰めた農民の一人として兵助も江戸へ流れ込んだ。そうして江戸の新しい風に吹かれ、新たな特産物、新たな商売を模索した。

兵助が江戸で源内先生と出合ったかどうかはわからない。幕末には百万の人口を抱えたといわれる江戸の町で二人が出会った可能性は低い。しかし、わずかな可能性を大きく膨らませて語るのもまた香具師の香具師たる所以だ。そうして、兵助の育った疲弊した農村と源内先生の周りに吹いていた新しい風が、永井兵助の蝦蟇の油売りを生み出したのは間違いないように思える。

平成十八年度

がまの油売り口上研究会　総会のご案内

平成十八年三月二十五日(土)午前十時～
総会終了後　講演会
午後　1　時より　年度最後の練習会

土浦市立〈小町の館〉にて

がま歌壇

がま口上　芸を極めて　サァ出番

飽食の　カラスに人間　籠に逃げ

無事かえる　孫のお使い　ほっとする

ヨレ様に　旦那忘れて　首っ丈

政治家の　利害おそれか　二枚舌

晩学へ　いきいきくいる　老いの日々

がま仙

左の絨毯と口上の両方に対価を払ったつもり。
値段は秘密…。

口上は生きる糧①

田神　まさこ

暮れもおしせまった十二月二十一日、おせちも大掃除も放棄して私は生まれて初めて一〇日間の海外旅行というものに参加した。行き先はトルコ。姉と娘という周りもうらやむベストメンバー（？）での、ミーハー旅行。格安ツアーであっても、スーツケースの持ち運びさえポーター任せのお姫様気分で。

さて、旅の大きな楽しみの一つはショッピングだが、この地もトルコ石・陶器・絨毯・革製品など、先々でお金さえあればと、購買欲求との戦いが続いた。その道中、特に感動を禁じえなかったのは、カッパドキアにある絨毯のお店だ。外からは何の建物か分からないし、ドアの内側でもまだよく分からない。次のドアを開けると織り子さんが、所在なさげに織りかけの絨毯の前に座っていて納得。そこで簡単な織り方と特徴の説明を受け、次の間に。広々としたホールの壁には素敵な作品が架けてあり、トルコの習慣でもある飲み物の接待を受ける。チャイ〔紅茶〕やコーヒー・アルコール類まで自由にオーダーできるのだ。そこでお茶を飲みながら聞かされたセールストークは、まさに圧巻。「絨毯なんか買う人居るの？」と冷ややかにお店に入ったツアー一行であったが、三十分後にはあちこちで、商談がまとまった拍手が響くこととなる。その鮮やかな手法、トークについては紙面の都合で次号に譲ることにするが、その口から発せられる言葉が巨額の収益を稼ぎ出すことは間違いない。（次号へつづく）

編集後記

どうにか本号をお届けすることができ、ホッとしております。梅・桜の季節、皆様の活躍の季節となりました。好奇心と思いやりの心で、今年も楽しく活動できるよう祈っております。原稿もお待ちしています。

編集子